【クロスカルチャー出版　速報】2021.5.7

加藤孝男・田村ふみ乃著『歌人　中城ふみ子　その生涯と作品』が読売新聞 2021 年 5 月 6 日夕刊に掲載されました。

18歳藤井二冠 追いかける

20代棋士 一歩ずつ頂へ

名人戦に斎藤八段 関西 有望株そろう

将棋界の将来といっても、数々の最年少記録を塗り替えてきた藤井聡太（竜王18）（王位、棋聖＝各奪＝だけではない。藤井二冠より年上の20歳代の棋士たちも、各々と実力を伸ばし、飛躍のチャンスをうかがっている。関西の有望株に期待や将来像などを聞いた。

（橋本彩資、張辺崇治）

（棋の現状は4強を追う10～15人の中の一人。4強と五分以上で戦えるようになるのが目標です」と斎藤慎太郎八段(28)＝日本将棋連盟関西本部＝は語る。

「4強」とは、八大タイトルを分け合う藤井二冠＝同＝と豊島将之竜王(31)（叡王、王将）＝同＝、渡辺明名人(37)（棋王、王将）＝東京本部＝、永瀬拓矢王座(28)＝同＝のことだ。

斎藤八段は奈良市出身で、2012年にプロ入り。通算に王座を1期取っている。6階級制の竜王戦ランキング戦では1番上の1組に所属し、5期級制の順位戦（名人戦予選）でも昨年来、最上位のA級で戦い、今年は渡辺名人への挑戦権を得た。現在、名人戦七番勝負の真っ最中だ。明治前に話を聞くと、「渡辺名人は攻めの突破力があって作戦も周到。あんなふうになりたい、と思う棋士です。この勝負を飛躍への新たな一歩にしたい」と決意を固っていた。

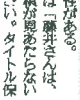
七番勝負の初戦は、形勢不利な局面を粘り抜いて逆転勝ち。第3局まで1勝2敗で、挑戦した勝負を続けている。

斎藤八段にとって、藤井二冠は「刺激をくれて、『今以上の力を出そう』と思わせてくれる棋士の一人」。自身が名人位を取れば「4強」に割って入り、タイトル挑戦で藤井二冠を上回るという課題でも、今回は大きな勝負だ。

大橋貴光六段

豊島将之八段

斎藤慎太郎七段



▲「じっくり考えることが好きで、長い勝負になることが多い」と話す藤井聡太竜王（奈良市出身）

関西勢では、王位獲得経験のある順位戦A級の菅井竜也八段(28)（岡山市出身）、藤井二冠に連敗中の永瀬拓矢八段(28)（和歌山県出身）も期待大だ。奈良勢では、昇級を争っている永瀬王座に、竜王戦1組の佐々木勇気七段(28)（埼玉県出身）らが続く。

日本将棋連盟常務理事の井上慶太九段(37)は「藤井さんの存在が触媒なので、関立ちにくくなっているとはいえ、20代は棋士として発展に向かった時期。30代半ばにかけてタイトル保持者になるケースもありますね」と期待する。

将棋界には、藤井二冠の急成長ぶりを「高速道路をスイスイ走り抜ける車のようだ」と評する声がある。これに対し、一般道を進むような着実さで前進する棋士もいる。彼らの中から何人が抜け出してくるか、今後の大きな見どころだろう。

三角関係「不倫」を再定義

山田詠美さん著「血も涙もある」

「恋愛とは価値観をぶっ壊されることでもあると思う」

いつの世も、耳目を集める醜聞の一つが不倫。山田詠美さんの『血も涙もある』（新潮社）は、ある夫婦とその夫の愛人との関係を描く小説だ。不倫とは、男女関係において人の道を外れることではなく、自分の倫理に反することだ、と定義し直す。

（武田裕美）

「どれが倫理でどれが倫理にあらずか。それは誰にもわからないのに、今はスキャンダルがあるとみんなが他人を糾する。私が男女の結びつきの中で、『大事』あるいは『尊重すべき』と考えている価値観を提示してみたいなって」

料理研究家の鹿久江は、夫の太郎を目やかし、浮気も見逃してきた。2人の関係に自信があるからだが、自分の助手の樋子上との恋にはむがきわめて、何しろ樋子は人妻。夫は人の夫を愛する」と、世の一般論からは外れている。3人がそれぞれ、ユーモラスかつ切ない言葉を吸他し、三角関係を語る。

三者三様に「不倫」を語る場面がある。しかしそれは、男女関係での不倫ではなく、例えば鹿久江の場合なら、自分の倫理に反し夫を傷つけること。そんな彼らが相手を求める気持ちは隠りなく純粋だ。

「世の中に溢れているような打算や損得抜きに、『明日この人がいなくなったらどれだけ寂しいだろう』という気持ちだけでつき合うのがベストだと思う」

恋愛小説の妙手は「恋愛をとりわけ書こうと思ってはいない」と意外なことを語う。「どうしてこの人と一緒にいるとこうなってしまうのかと、自分の中からどうしてこの感情が生まれるんだろうとか、そういう人間関係のことを書きたい」。2019年刊の『ファーストクラッシュ』（文芸春秋）でも、ある少年に心をかき乱される3姉妹を描いた。

「小さい頃からいじめられっ子で、寄る辺ない感じで生きてきた」という。同じような思いを抱える人々に読まれることは、この上ない喜びだ。デビューから36年。「『自分語』という王国があるならば（自分で）その王国のために小説を書き続けないとられない気持ちです」

平城宮跡の木簡 3言語の視点で

英中韓 奈文研がパンフ

奈良文化財研究所（奈良市）は平城宮跡で出土した木簡の役割や歴史的背景などについて、英語、中国語、韓国語で紹介するパンフレットを制作した。単なる日本語版の翻訳ではなく、各言語文化圏出身の研究員がそれぞれ関心を持つ内容を検討し、手のひらサイズで紙を折ったり広げたりできるように仕上げた。3月から平城宮跡資料館（奈良市）で配布している。

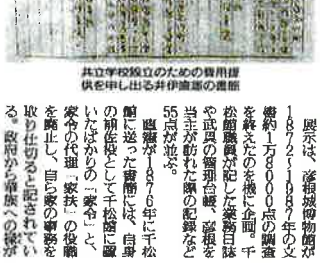
例えば韓国語版は「鹿」や「鯛」などの文字が記された木簡とともに、丸く切り取った紙を皿に見立てて食材の写真を掲載。中国語版はクイズ形式で六角形に閉じることができる。英語版は折りたたむと形状が変わるユニークなデザインとなっている。

奈文研の馬場基・史料研究室長は「外国人観光客が思わず手に取り持ち帰りたくなるものに仕上がったと思う」と話している。

木簡を紹介する英語（右上）、中国語（右）のパンフレット

井伊家の献身 明治以降も

彦根の教育、産業に関与



共立学校設立のための費用提供を申し出る井伊直亮の書簡

旧藩士の井伊家に伝わる近代の文書を集めた特別企画展が、滋賀県彦根市の彦根城博物館で開かれている。明治の廃藩置県後、藩政と密接に関わり続けた井伊家の歩みを伝える資料がそろう。

近代の資料展

彦根藩は徳川家康に仕えた直政が初代藩主で、井伊家は幕末の最後の大老として、江戸時代を通して彦根を治めた。1860年の桜田門外の変で、幕府大老だった直弼が暗殺されたことでも知られる。

展示は、彦根城博物館が1877～1987年の文書約1万8000点の調査を終えたのを機に企画。千松館関係が記した業務日誌や武具の管理台帳、彦根を当主が訪れた際の記録など55点が並ぶ。

直弼が1876年に千松館に送った書簡には、自身の補佐役として千松館に「家令」と、家令の代理「家扶」の役職を廃止し、自ら家の事務を取り仕切ると記されている。政府から華族への家禄が廃止されたことが書簡にあるとみられ、廃藩置県後の旧大名家の複雑事情が見て取れる。

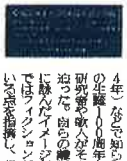
同年に記された書簡の写真は、直弼が「共立学校」（現・県立彦根高校）設立のための寄付を申し出る内容。旧彦根藩出身者に奨学金を貸した「彦根育英会」の資料もあり、彦根の教育に力を注いだとわかる。火災の被害者から届いた救済金提供に対する礼状や、廃藩置県後の払い下げを受けて樹木に携わったことを伝える資料などもある。

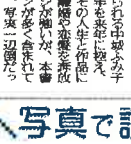
竹内光太郎学芸員は「数々の文書からは、千松館を残し、彦根の教育、産業に力を入れた井伊家当主たちの地元への強い思い入れが感じられる」と話している。

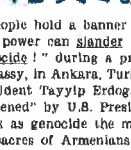
6月14日まで（6月8日は休館）。☎0749・22・6100。

（松浦彩）

井伊直亮肖像画







新刊

◆『歌人　中城ふみ子　その生涯と作品』加藤孝男、田村ふみ乃著、歌集『乳房喪失』（1955年）などで知られる中城ふみ子の生誕100周年を迎えて、研究者や歌人がその人生と作品に迫った。自らの結婚や恋愛を奔放に詠んだイメージが強いが、本書ではフィクションが多く含まれている点を指摘し、写実・辺境だった現代短歌に新たな地平を切り開いた評価する。（クロスカルチャー出版、1980円）

◆『ボーイ』西村麗蘭著。痛烈な「男性」を描いた表題作を筆頭に、「男性」に主題を置いた表現豊かな短編集。

◆『ボーイ』西村麗蘭著。痛烈な「男性」を描いた表題作を筆頭に、「男性」に主題を置いた表現豊かな短編集。

◆『新型コロナウイルスの影響で、開催日程が変更になることがあります。開催日を確認してご活動ください。

写真で読む英語

People hold a banner reading in Turkish "No power can slander the Turkish people with genocide!" during a protest outside the US embassy, in Ankara, Turkey, on April 27. Turkey's President Tayyip Erdogan said he was "highly saddened" by U.S. President Biden's decision to mark as genocide the mass deportations and massacres of Armenians in the early 20th century Ottoman Empire. (AP)

◆slander：名誉を傷付ける、中傷する

◆genocide：集団殺害

◆deportation：国外追放、強制送還

※引用文は原文と一部異なります

【和訳】4月27日、トルコの首都アンカラの米国大使館前で行われた抗議活動で、「いかなる勢力もジェノサイド（集団殺害）によってトルコ国民の名誉を傷付けることはできない！」とトルコ語で書かれた横断幕を掲げる人々。トルコのタイップ・エルドアン大統領は、20世紀初頭にオスマン帝国で起きたアルメニア人に対する大規模な国外追放と大虐殺をジェノサイドとしたバイデン米大統領の決定によって、「非常に悲しんだ」と述べた。

米が「虐殺」認定 トルコと対立

【解説】第1次世界大戦中のオスマン帝国（トルコの前身）で1915年4月、東部に住むアルメニア系住民が多数、殺害された。敵国のロシアと内通していたと疑われたためだ。アルメニアは「150万人が虐殺された」と主張する一方、トルコは「事実でない」と否定し、論争は現在も続いている。米国の歴代大統領の多くは、同盟国のトルコに配慮し、虐殺の表現を避けてきたが、人権問題を重視するバイデン大統領は4月に虐殺と認定し、トルコは反発している。バイデン氏は就任前から強権的なトルコのエルドアン政権を批判しており、米国とトルコの関係は冷え込みが続いている。